

# 「わたしの教育記録」 特選作品発表！

## 全入選作品選評

今年度の「わたしの教育記録」特選作品を発表します。  
その前に4人の審査員の方々から、入選作品についての選評を伺いました。

## 教師の取り組みによる子どもの学びの変化が見える記録を来年度にはさらに期待

今年も全国各地でいろいろな創造的な実践の取り組みが行われていることを感じさせていた  
だいた。

特選の神奈川県横須賀市立大矢部小学校の「図書館大改造」進化する「森の図書館」福留三都先生の取り組みは、学校の教職員での学校図書館環境の改造によって、子どもたちの読書の量や質がどのように変化してきたかが記録や付されたDVDから具体的に覚えてきた。図書館のゆるキャラを考えるなど現代的な発想も入れ、読書への多様なアプローチが見えるところが特選にふさわしい実践であった。どの学校でも参考にして取り組める活動でもある。また、特別賞の千葉県船橋市立二

宮小学校 河邊昌之先生の「学級模擬選挙からの学び」は、今年のお話である18歳からの選挙権との関係からも、学校という最も身近な社会から選挙意識を自分事として子どもが高める試みとして興味深い。

入選では、言葉の力を高める実践が多かったのが今年の特徴である。集団読書の森本彰徳先生、作文指導の工夫の菅野宣衛先生、1年生への「書くこと」指導の工夫の土居正博先生の取り組みなど、的確な指導の工夫が見られた。理科でも奈良 大先生の焦点化・適  
用化の学習は、新人とは思えない着実な手立  
てが記録されている。一方、三好有希先生は  
総合的な学習の時間と特別活動などを生かし、



東京大学大学院  
教育学研究科教授  
秋田喜代美さん

広がりをもったその地域ならではの報告である。

今年の応募記録の全体的な特徴としては例年に比べ、残念なことではあるが、実践記録の記述がやや薄く読み応えのある記録が少なかったことがある。それは教師自身がどのような実践をしたかは述べられているが、それによって子どもたちの学びがどのように深まり、何が生じたのか、それは何によるのかの記述が少ないことによる。いま子どもが主体的能動的に関わる学びとしてのアクティブ・ラーニングが求められている。その中で教師の取り組みによる子どもの学びの変化が見える記録を来年度にはさらに期待したい。



## 工夫に満ちた着実な実践が多く見られ、頼もしい

教科・領域を超えた「言葉の力」を育成し、それを基盤に「確かな学力」を着実に形成し、その上立って社会人として活躍すると同時に、自分自身の人生を充実した形で生きていく「生きる力」の育成を、というのが現行の学習指導要領が掲げる大目標である。こうした大綱的な性格づけは、次期の学習指導要領でも引き継がれることになっている。応募された作品を読ませていただき、こうした大目標が、現実の教育活動として様々な形で工夫され実践されていることを感じ取ることができた。心強く、また頼もしい思いがある。選に入った作品は、こうした意味でいずれ

も優れたものであり、各地の教師の方々にぜひとも参考にしていただきたいものである。

例えば、小学校の福留三都さんの「図書館大改造」進化する『森の図書館』は、子どもたちが「本の森」に入り込み、ゆつくり読書や調べ学習ができる空間を実現しようと学校を挙げて取り組んだ記録であり、来館者数も貸出数も大幅に向上するという成果が上がったという。中学校でも森本彰徳さんの実践記録「集団読書の質を高める読書指導」3年間で50冊にチャレンジ」が提出され、生徒たちに本を身近な存在として意識させ、読書習慣をつけていく取り組みが報告されてい



兵庫教育大学前学長  
梶田 叡一さん

る。両者とも学習の土台として、またツールとして本を活用する力をつけていく、優れた実践である。

小学校の菅野宣衛さんの「対話を通して書く力」を育てる実践、新採・新人賞の土居正博さんの小学校1年生に「変化をつけた反復」と「クラス内文通」で書く力を育てようという実践も、学力基盤としての「言葉の力」を育成する上で参考になる点が多い。

他の入選者の方々の教科・領域教育に力を入れた実践の記録も、啓発される点が多々あり、ぜひ多くの学校で、これらを参考にした実践をやっていただいたいと思う。



政策研究大学院大学  
客員教授  
永井 順國さん

本が多く、並べ方もバラバラ。司書教諭として全校の職員・児童総がかりで、快適空間づくりに乗り出す。「本は友だちコーナー」を開設し、「言葉早調べ大会」などのイベントも仕組む。2年間で、来館者、貸出数が2倍近くに、図書館利用の授業も倍増した。環境を整

## 子どもたちの「やる気」を引き出す環境づくり

文章の力をつけるには、「活字を食べるよう」に読む、つまり多読・乱読の習慣を身につける以外に方法はないと、かねてから考えている。そのためには、子ども時代からそうした環境を整えられ、かつ基本的な文章作法を教わっておくことが望ましい。

福留三都氏の「図書館大改造」進化する『森の図書館』(特選)は、全国学力・学習状況調査の「本やインターネットを使ってグループで調べ活動をよくしている」との質問に当てはまると答えた子どもがゼロだったことに触発されて始まる。薄暗く汚い部屋。古い

えた結果だ。森本彰徳氏の「集団読書の質を高める読書指導」3年間で50冊にチャレンジ（一人選）は、中学校の学年ごとに推薦図書50冊を用意するほか、「夏休み15冊の読書」課題などで「本漬け」を促す。推薦本に名作マンガも加えたり、「感想文不要」というのがない。菅野宣衛氏の「対話を通して書く力を高める作文指導の工夫」（入選、土居正博氏の「入門期の一年生への『書くこと』指導の工夫」新入賞）は、教師と子どもとの対話や、クラス

## 実践の積み上げが大事―次の扉を開く

実践記録は、日々の小さく見える営みの積み上げです。記録に残すことは、一つの実践で完結するのではなく、成果が次の扉を開くエネルギーになるので、実践力が加速することを体験的に知っています。次の扉が見える質の高い実践が魅力でした。

特選の福留三都氏「図書館大改造」進化する『森の図書館』は、図書館の活用率が低いという実態から問題意識をもち、魅力のあるもの到大改造をした実践です。統一感のある掲示板や選書と廃棄、学習コーナーの設置など、創意工夫を凝らし図書館活性化につなげた精力的な実践で次の課題に対する勢いを感じました。特別賞の河邊昌之氏「学級模

内文通などの仕掛けを活用した文章作法の実践として、大いに参考になる。特別賞となった河邊昌之氏の「学級模擬選挙からの学び」は、小6の学級内に「卒業までの過ごし方の目標」をテーマに、子どもの発案で5つの政党をつくり、主張を表明して投票を実施する。「報道陣の取材」で盛り上げる念の入れようだ。主催者教育として、地域課題に視野を広げることとも可能だろう。その点、三好有希氏の「大好き!!緑台!!」『総合的な学習の時間』と『特

擬選挙からの学び」は、社会科と総合的な学習の時間で、学級模擬選挙を実践。卒業期を意識し、「学校に何を残したいか」ということをテーマにした模擬選挙が熱く綴られています。入選の菅野宣衛氏は、作文指導で書き方や書く方法がわからない子に対して、対話を通して解決した実践で、授業の様子が伝わってくる記録でした。森本彰徳氏は集団読書（中学生）の質を向上させることを目的にしたものでした。生涯教育としての読書習慣を身につけることを目標にした、3年間で50冊のチャレンジは読み応えがありました。三好有希氏は、自分の街に愛着をもち、地域のために主体的に行動できる子どもを育てたいとい

別活動』を軸に子どもと地域をつなぐ」（入選）は、商店街の活性化や桜の保護活動をテーマに、地域を知る・理解する・課題を見つけて解決策を探るなどの実践記録である。「教育と地域コミュニケーション創造」は、今後ますます重要になるに違いない。新採・新人賞、奈良大氏の「日常生活とのつながりを感じる理科学習」『焦点化』と『適用化』の学習を通しては、子どもの「やる気」を引き出す取り組みとして、新人らしからぬ力量を感じさせた。



前・京都女子大学教授  
吉永 幸司 さん

う願いを込めた取り組みでした。地域を理解する、地域に発信する、地域の人とつながるという経験を通して育つ子どもの姿が輝いていく様子が丁寧に綴られています。新採・新人賞は若さが溢れ、手応えを感じる実践記録でした。奈良 大氏は、理科で学んだことを日常生活に生かすという発想で、「焦点化・適用化」をキーワードにした授業の工夫です。ブタの肺やニワトリの心臓を教材にした授業記録は迫力がありました。土居正博氏は、入門期の書くことの指導を、基礎の徹底と書きたいことをもたせるという面からまとめた記録でした。丁寧な指導で確かな子どもの成長が伝わってきました。